協同組合間の連携を進めるために まずは互いを知って、学ぶことから

新井ちとせ
日本生活協同組合連合会　副会長

あらい・ちとせ／1965年静岡県生まれ。結婚後、さいたまコープに加入し、コープ委員、エリア委員、理事を務める。2015年に生活協同組合「コープみらい」理事長に就任。現在、日本生活協同組合連合会副会長、日本協同組合連携機構理事、国際協同組合同盟アジア・太平洋地域（ＩＣＡ－ＡＰ）理事／女性委員会委員長

生活協同組合（生協）は、組合員が出資・利用・運営し、くらしのニーズや願いの実現に向けて、事業や活動を展開する。組合員は全国で約3000万人にのぼる。全国の生協組織を支える日本生活協同組合連合会の新井副会長に、協同組合との出合いや活動の魅力、今後の協同組合連携について、語っていただいた。

組合員同士の「わいわい」「がやがや」を重視

――新井さんは、もともと地域の生協の一組合員として活動をされてきました。どのような接点から活動が始まりましたか？

私が生協の組合員になったのは、公園で仲よくなったママ友との交流がきっかけです。友人たちと共同購入の班をつくり、マンションの前でブルーシートを広げてみんなで商品の仕分けをしながら、毎週、おしゃべりの花を咲かせていました。商品の情報交換をしたり、子育ての話をしたりして、それこそ井戸端会議のように。やがて「コープ委員」となって、食の安全や環境問題、平和など、学習活動に参加するようになりました。生協の活動は間口が広く、ハードルも低いので、気軽に参加できることが特徴です。地域で仲間ができたことが財産になって

います。

娘が幼稚園に入園するようになって任命されたのが、地域の生協組合員と生協をつなぐコーディネーター役の「エリア委員」です。当時、専業主婦で、仕事に復帰する予定でしたが、「社会に出る前のリハビリだと思ってやってみない？」「生協の活動は子育て優先でできて、みんなが助けてくれるから」という誘い文句にほだされてしまいました（笑）。

――仲間と活動するなかで、学んだことや培ったことを教えてください。

とくに勉強になったのは民主的な運営手法です。9月に地域懇談会を始めて、地区別の総代会を開いてみんなで議論する機会を何度もつくり、翌年6月の総代会で議決をするまで、1年近くの時間をかけて話し合います。また、そのさい仲間と確認するのは、「ちゃんと議論することが大事だよね」「自分の意見を言おう」ということ。一人ひとりが考え、みんなで話し合って、互いに認め合える、そういう場づくりが生協の土台になっているのだと思います。組合員同士の「わいわい」「がやがや」から始まる会議は、脱線してむだ話になっても遠回りしても、そこからアイデアや解決の糸口やアクションにつながることがあります。「こんなことをやってみたい、できたらいいね」といった、わくわくするようなことがおのずと生まれてくると感じています。

私には、今も胸に刻んでいる先輩のアドバイスがあります（下記）。

- **一人ひとりが自分の意見を言って、話し合いで決めたことを大切にしよう。**
- **悩んでいることは一人で抱え込まずに、みんなで知恵を出し合おう。**
- **思いどおりにならないのが子育てと組合員活動。けっして力まず、前向きに考えよう。**

これらのことは、みんなで明るく元気に楽しく活動するために必要な考え方であると同時に役割が変わっても大切にしています。

共通テーマを持って緩やかに一致する

――2015年にコープみらいの理事長、日本生協連の副会長に就任されました。とくに力を入れてきた取り組みはどんなことでしょうか？

「協同組合は学びの機会が多い組織。他の協同組合の組合員との交流を広げたい」と語る

生協の取り組みはＳＤＧｓと親和性があり、実現に向けて役割発揮をしていかなくてはなりません。日本生協連ではコープＳＤＧｓ行動宣言をまとめ、「持続可能な生産と消費のために、商品とくらしのあり方を見直していきます」「誰もが安心してくらし続けられる地域社会づ

くりに参加します」など、7つの柱の取り組みを進めています。

ＳＤＧｓの言葉が出てきたころ、まず、組合員にこれまで生協が取り組んできた活動はＳＤＧｓそのものであることを理解してもらうことから始めました。例えば、生産者との交流をとおした産直活動やエシカル消費対応商品の供給、紙資源の削減、プルタブ・アルミ缶の回収、フードドライブの取り組みなど。さまざまな生協の活動がＳＤＧｓに結びついていることがわかれば、組合員の自信や誇りにつながります。だからこそ、今までやってきたことを、より深く進めていくこと、もっと地域や社会に広げていくことが大事です。アンテナを高く張って、内外にアピールするよい機会だと考えています。

日本生協連では、持続可能な社会の実現に向けて「コープＳＤＧｓ行動宣言」を発表している

昨年実施して組合員に喜ばれた取り組みの一つに「くらし応援全国キャンペーン」があります。食品や光熱費の値上げが続くなか、組合員のくらしを支えるために、身近な日配商品、加工食品を中心に対象商品を選定し、全国各地の生協で期間限定で値下げをした特別価格で提供しました。安くてよい商品を届けて、組合員の日常のくらしを事業でも支えていきたいと考えています。

しかし当然、ただ安さだけでいいの？という問題もあります。産地や生産者について知って、適正価格で購入することや、地産地消のよさを理解することも必要です。おいしく食べて、生産者に感謝を持ち続ける、そういったことを組合員と一緒に学習することが大切だと痛感しています。

その意味では、生協にはとてもよいフードチェーンがあり、そこに「人」がいて、いわばよいヒューマンチェーンができています。生協と関わってよかったと思える生産者や取引先、消費者をつないで、持続可能な事業・活動をめざしていきたいと考えています。

――今後、さらにＪＡをはじめ他の協同組合との連携も重要になってきます。どのように進めていくことが大切でしょうか？

それぞれの協同組合が緩やかに一致できる点を見つけて進めることが第一歩だと思います。「これはいいね！」という取り組みがあれば相乗りすることです。

先日、日本協同組合連携機構（ＪＣＡ）の会議に出て、なるほどと実感した意見がありました。それは、協同組合連携のゴールを見据えてプロセスをつくるために、まずは互いを知ること、そして互いを知るためには、テーマが必要であること、そこで「健康」を切り口にするとよいのではという意見でした。「健康」は

だれもが関心を持ち、共感する、とても分かりやすい協同組合共通のテーマだと思いました。
「こんなことだったらできるんじゃない？」「とりあえずやってみようよ」と言えたら、すごくおもしろいし、わくわくすると思います。トライ・アンド・エラーもありですよね。まずは、小さいことから始めてみることが大切ではないでしょうか。

私の夫の実家は元兼業農家で、ＪＡの組合員です。私のように複数の協同組合のメンバーである家庭も多いと思います。とくに食の分野は、生産者と消費者のつながりも強いので、お互いをもっと知って、学んで、つながっていける機会をたくさんつくっていきたいと考えています。

世界を見渡せば紛争や気候変動などで、私たちの命と暮らしが脅かされている時代です。そんな時代だからこそ、協同組合が手を携えて私たちの尊厳を守っていくための関係づくり、地域社会づくりを「ワンチーム」でつくっていけたらいいなと思っております。